

東京大学大学院総合文化研究科の皆さんへ

東京大学全学研究科等横断教育プログラム/ASNET 科目 地域文化研究特別講義Ⅱが4月27日から開講いたします。

がんは文明病といわれる。人類は病と闘い生き延びる手立てを探してきたが、経済成長目覚しいアジアにおいては、皮肉にも、感染症の克服により手に入れた高齢化が最大のリスクとなりがんが急増している。グローバル化の波にさらされて経済格差が拡大しているなか、がんはアジアの人々の暮らしに深い影を落としはじめている。

「近くて遠い」と言われてきたアジアは、日本にとって内なる自己として自らを省みさせる存在であり、また絶対的な他者としても屹立してきた。アジアとどう向き合っていくべきなのか、アジアの今の実像を浮かび上がらせるがんという重い課題を架橋としておいてみたとき、それはどんな意味をもつ問いなのか？

戦後70年という節目において、アクチュアルな知の課題を内包した問いを学際的に繋いでいく知が、アジアの未来を生き延びる智慧紡いでくれるのではないか。

戦後70年という節目に立ち
過去をみつめて 未来を紡ぐ
いまこそ学際の知が試されている

4/27 東アジアの余白から見たがんというやまい

真鍋祐子（東京大学教授）

5/11 アジアのがんの現在をどのような視点でとらえるべきなのか？

赤座英之（東京大学特任教授）

5/18 地縁・血縁が乗り越えるアジアのがん

波平恵美子（お茶の水女子大学名誉教授）

5/25 日本人はアジアとどう向き合ってきたのか

永六輔（放送作家）×吉見俊哉（東京大学教授）

6/15 アジアの高齢化社会はがんどう向き合うことができるのか

辻哲夫（東京大学特任教授）

6/22 日本・アジア・アメリカ 国際社会を生き延びる

藤崎一郎（上智大学特別招聘教授・前米国駐箚特命全権大使）

6/29 アジアのいのちをつなぐ食 がん予防とアジアの暮らし

服部幸應（学校法人服部学園理事長）

7/6 日本はアジアとどう向き合っていけばいいのか

田原総一郎（ジャーナリスト）

7/13 アジアの中の日本、日本の科学はどこへ向かうのか

江崎玲於奈（日本学士員会員 ノーベル物理学賞受賞者）

がんというアジアの喫緊の共有課題を通して、高齢化、経済格差、死生観の変容、グローバリズムとナショナリズムのねじれ、などアジアの今日的な課題が浮かび上がってくる。本講義は、がんを医学はもとより、政治・経済・文化など様々な領域から捉えてみることを通して、世界の内実を読み解くことを学問的考察の端緒とする「Cross-boundary Cancer Studies」という学際連携プログラムに位置づけられている。

冬学期に 本授業と連動した授業を開講予定 ITASIA128 Surviving Cancer in Asia

時間割コード 31D220-1328S 31M220-1328S 4990180

月曜日 5限 16時50分—18時35分

本郷・福武ホール B2階・福武ラーニングシアター 4月27日のみ 工学部 93B教室

大学院生以外の聴講参加の場合

連絡先

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 「総合癌研究国際戦略推進」寄附講座

赤座研究室 03-5452-5343

担当 河原ノリエ norie.kawahara@med.rcast.u-tokyo.ac.jp